

## 組織別評価の評価結果について

### 目 的

組織別評価は、徳島大学の教育研究組織の活動状況、成果、機能を点検・評価し、その評価結果を組織の機能向上、改善・見直し等に活用することを目的とする。

### 点検・評価の方法

#### ◆ 対象期間

令和4年度活動実績

#### ◆ 対象組織

教育（学部、研究科）、研究（研究部、研究所）、共同教育研究施設等、病院

#### ◆ 評価方法等

各組織が自己点検を経て作成する「活動報告書」及び指標等の実績値に基づき評価

##### （1）評価者（学長及び理事）による評価

活動報告書を基に、組織の規模や特性等を考慮し総合的な評価を実施

##### （2）評価指標の実績による評価

「実績評価に活用する指標」を定め、各指標を「判断基準」に沿って判定し、その平均値を評点とする。

##### （3）達成必須項目による評価

「達成必須項目及び達成水準」を定め、水準を満たしているか評価

##### （4）最終評点の算出

$$\text{最終評点} = \text{（1）の評点}^{*1} + \text{（2）の評点}^{*2} + \text{（3）の評点}^{*3}$$

\*1 評価者7名の内、最高点1名、最低点1名の評点を除いた5名分の評点の合計

\*2 各指標の実績評価の平均点（各指標の合計/指標数） ※令和5年度は実施せず

\*3 各項目の評点の合計

※コンプライアンス関連による重大な事案が生じた組織については、最終評点から減点する場合がある。

### 評価結果

評価対象組織となっている全32組織について、上記評価方法に則り評価し、P2以降のとりの結果となった。

なお、本評価の結果は、組織の機能向上、改善、見直し等に活用するとともに、大学公式ホームページに掲載し、公表する。また、インセンティブ経費配分の算定へも反映させる。

## 各組織の評価結果

### ■ 教育（学部）

総合科学部	最終評点：15点
<p>《特記事項》</p> <p>○ JR 四国との連携事業「地域観光チャレンジ 2022」にて銅賞受賞 四国4国立大学と JR 四国の連携事業「地域観光チャレンジ 2022」に参加し、本学部チーム（松茂班）の企画案が銅賞を受賞した。また、地域活動を推進するとくしまボランティアパスポートに参加した3名の学生が徳島県知事及び学長より表彰を受けるなど、学生による社会貢献実績が広く評価されている。</p> <p>○ 学外のアクターと連携した教育や学部公開セミナーの積極的な実施 心理職養成における学外施設と連携した心理実習や、ゲストスピーカーを招聘した講義など、地域の諸アクターと連携した課題解決型の実践教育を実施しているほか、一般の方や高校生などを対象とした学部公開セミナーを複数回実施するなど、地域連携を意識した教育活動を積極的に推進している。</p>	

医学部	最終評点：19点
<p>《特記事項》</p> <p>○ 卒業試験の見直しと解説講義導入による国家試験現役合格率の向上 医学科の卒業試験において、医師国家試験の合格最低正答率の上昇に対応するため、合格ラインの得点率を 65%へ引き上げ、卒業試験問題作成講習会による国家試験に準拠した問題作成の徹底、各分野別に分かれていた試験を4つの領域に統合化、試験問題の相互ブラッシュアップ等見直しを行うとともに、すべての試験について実施後の解説講義を導入した。これらの取組の結果、医師国家試験の現役合格率 100%を達成した（第3期年平均 94.9%）。</p> <p>○ 医学部学生による子育て支援アプリの開発 コロナ禍の影響により、近年増加傾向の産後うつに対する課題解決への取組として、医学部学生が中心となり開発した、乳幼児の啼泣理由とその対処法を提示する泣き声理解促進アプリ「あわベビ」が、令和4年度総務省「異能vationプログラム」のジェネレーションアワード部門「飛躍的に便利になる分野賞」を受賞した。</p> <p>○ スキルスラボを活用した低侵襲手術手技トレーニングプログラムの実施 スキルスラボを活用した低侵襲手術手技トレーニングでは、これまでに開発したプログラムを継続するとともに、新たに耳鼻咽喉科、頭頸部外科では鼻出血・内視鏡トレーナー実習、一般診察手技実習を、産科婦人科では切開創胎児娩出・分娩手技実習プログラムを新たに開始した結果、計 127 件、のべ 696 名のトレーニングを実施した。また、卒業時アンケートでは、80.5%の学生が、「低侵襲手術に必要とされる解剖学的知識や基本的手術手技を身に着けることができた」と回答しており、本プログラムが医師に求められる課題解決能力の修得に繋がっている。</p>	

歯学部	最終評点：15点
<p>《特記事項》</p> <p>○ リサーチマインドを備えた歯科医師の養成 歯学科では、令和4年度から、より高い実践能力を備えた歯科医師の養成を目指したアウトカ</p>	

ム基盤型新カリキュラムに移行するとともに、新たに6年次に歯科医学ゼミを開講し、研究に従事する時間を拡大することで、より高いリサーチマインドを備えた歯科医師の養成を目指す。

○ クラス担任制度の充実

歯学科では従来、各学年に基礎系教授1名、臨床系教授1名の計2名のクラス担任を充てて生活指導、就学指導を行ってきたが、より手厚い指導を行うために、令和5年度から基礎系、臨床系の若手教員を1名ずつ副担任として追加し、クラス担任を4名とする方針を決定した。加えて、クラス担任が男性教授のみである学年がほとんどであったため、少なくとも1名の女性教員をクラス担任として配置するなど、多様性に配慮できる体制を構築している。

薬学部	最終評点：18点
《特記事項》	
○ 学修改善サポート体制の構築と高い国家試験合格率 教務委員会内に学修改善サポートワーキンググループを設置し、前期・後期試験結果の分析、個別指導及び国試受験生の模試結果の分析を行う体制を構築する等、学生の学修支援体制を強化しており、薬学部における令和4年度薬剤師国家試験合格率は97.4%、73大学中3位という高い実績となっている。	
○ 外国籍教員による英語科目の新規必修化など学際的教育の推進 英語教育の充実策として、外国籍教員による「薬学英语」を学部2年生対象の必修科目として新規開講した。また、学外の外国人講師による講演会・ワークショップの開催や、学部間協定校との英語による症例検討会の共同実施等、新6年制学生に対するグローバル教育を推進している。	

理工学部	最終評点：20点
《特記事項》	
○ 医光/医工融合プログラムの設置 令和5年度からの「魅力ある地方大学の実現に資する地方国立大学の定員増」において、本学部の入学定員増とする取組構想が選定された。これに伴い、令和5年4月より、30名の定員増を行い、光学（工学）と医学を発展的に融合し、理工学部、医学部、ポストLEDフォトンクス研究所、先端酵素学研究所などによる学部等横断型の特別教育プログラム「医光／医工融合プログラム」を新たに設置する。 本プログラムの受入体制を整えるとともに、公式ホームページの開設、オンデマンド配信によるオープンキャンパスの実施、キックオフシンポジウムの開催等、新プログラム設置に向けた外部発信を積極的に実施した。	
○ 社会基盤デザインコースの学生による建築サークルの社会貢献活動 社会基盤デザインコースの学生による建築サークルAUTは、牟岐町内でものづくり体験教室や、県産材を使った木製玩具の保育園への寄贈等の活動を行っている。これらの活動は徳島新聞で取り上げられるなど、学生による社会貢献活動として注目されている。（SDG4、11、17）	
○ 6年一貫カリキュラムに関するアンケートの実施 大学院博士前期課程までを体系的に学ぶ6年一貫カリキュラムについて、導入後初めて本カリキュラムを選択した「令和4年度修士課程修了生」を対象に満足度アンケートを実施し、約	

90%の学生から6年一貫カリキュラムを選択して良かったとの回答を得た。また、良かった点として、「先取り履修により、大学院入学後の履修が楽になった」「修士研究の時間をより多く取ることができた」等の回答が多数あり、効率的な研究・教育体制の確立に向け、順調に進捗している。

生物資源産業学部	最終評点：18点
<p>《特記事項》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ キャンパスベンチャーグランプリ四国 CVG2022 最優秀賞受賞            本学部では、「アグリビジネス起業論」など起業等に関連する授業科目の各種開講を通して、学生たちの自律性、起業意識を醸成しており、生物生産システムコース森松教授の研究室学生グループが中心に行った、石井農場での養豚から食肉加工品に至る一貫生産をテーマにした起業プラン及び全国展開に関する発表が、「キャンパスベンチャーグランプリ四国」にて最優秀賞を、「とくしま創生アワード」では準グランプリを獲得した。(SDG9)</li> <li>○ 道の駅いたのと連携したインターンシッププログラムの実施            本学部のインターンシッププログラムの内、徳島県の特産品や廃棄食材を活用したアイデア料理コンテストを学生に対して実施し、選出された各料理をSDGsオリジナルメニューとして「道の駅いたの」のキッチンカーで販売する「道の駅いたのにおけるアイデア料理を通じたSDGs教育プロジェクト」を実施した。本プロジェクトは、実践的かつ創造的なSDGs教育を目的としており、学生の社会的・職業的自立に貢献したインターンシッププログラムを表彰する日本最大級のアワード「第5回学生が選ぶインターンシップアワード2022」(後援：内閣府、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、日本経済新聞社、マイナビ)では入賞に輝いた。(SDG4)</li> <li>○ イシマササユリの保護活動            本学部では、徳島県、阿南光高等学校、阿南市、阿南工業高等専門学校、伊島島民の方々と連携し、徳島県により絶滅危惧Ⅰ類に指定されている「イシマササユリ」の保護活動に取り組んでいる。令和4年度は、生物生産システムコース宮脇准教授と学生らが中心となりイシマササユリ自生地草刈りや土の耕起を行い、組織培養により増殖した球根約200株を移植した。(SDG13、15)</li> </ul>	

## ■ 教育（研究科）

創成科学研究科	最終評点：14点
<p>《特記事項》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ グローバル人材の育成推進            グローバル人材の育成に向けて、ダブルディグリープログラムの新規締結や、授業に外国人講師（バングラデシュ）を招聘する等、グローバル教育の充実を図っており、令和4年度の外国人留学生受入数は、121名と着実に増加している。また、留学先大学院での履修科目を本学の単位として弾力的に読み替える仕組みを新たに構築することで、留学におけるメリットを拡大し、より多くの大学院生が積極的に留学できる環境を整えている。</li> <li>○ 学生による地域社会における臨床心理学的支援            臨床心理学専攻では、徳島市開催のがん啓発イベントの開催・運営や精神保健福祉センターでのボランティア・スタッフとしての参加等、大学院生が地域社会における臨床心理学的支援に取り組んでいる。また、臨床心理相談室においても、主に大学院生が教員の指導を受けながら、</li> </ul>	

来談者の心理的支援を担当している。

医学研究科	最終評点：19点
《特記事項》	
○ 医歯薬学共創プラザにおける新しいClinical Anatomy Lab (CAL) の拡充移転 新鮮凍結されたご遺体のみが扱える現行のCALについて、さらに低濃度ホルマリンによる固定が適したヒトの器官・臓器・軟組織（例：脳組織）を対象とした臨床医学研究が可能となるよう、ホルマリン固定されたご遺体も扱えるようになる医歯薬学共創プラザに新しいCALを拡充移転する。これにより、臨床医学研究の種類・質が多様化し、色々な医学研究分野や他の研究科に所属する学生の利用増加、ひいては医学研究科の大学院（修士課程・博士課程）に入学する学生数の増加に繋がることが期待される。	
○ 基金等を活用した研究支援の拡充 令和5年度実施に向けて、令和4年度に新たに「濱本医学国際交流基金」及び「香川奨励賞」を創設した。濱本医学国際交流基金では、海外で医学研究に従事する学生または教職員（39歳以下）に対して、助成金を支給し、海外留学・研修を支援する。香川奨励賞では、臨床研究の活性化に繋げることを期待し、臨床研究において優れた成果を挙げた臨床系研究者の表彰を行う。	
○ 一流の研究者によるオンライン講義（英語）を提供するコンテンツを利用した大学院講義 一流の研究者によるオンライン講義（英語）を提供するコンテンツ「The Biomedical & Life Sciences Collection」の購読を開始し、令和4年度から大学院の講義に取り入れている。これにより、一流の講演を英語で聴講する機会が増え、国際化への意識の高まりが期待される。	

口腔科学研究科	最終評点：15点
《特記事項》	
○ 6つの大学院教育クラスターへの積極的な参加の推進 医療教育開発センターが支援する医療系専門職連携教育プログラムの1つである、6つの大学院教育クラスター毎に実施しているミニリトリート（大学院生の研究発表や特別講演）への積極的な参加を推進している。令和4年度は、脳科学クラスターミニリトリートにおいて最優秀発表賞を、骨とカルシウムクラスターミニリトリートにおいて優秀発表賞を受賞した。	

薬学研究科	最終評点：16点
《特記事項》	
○ 多様な奨学制度の活用 指導教員による充実した指導のもと、優秀な学生を育成した結果、日本学術振興会特別研究員及び徳島大学うずしおプロジェクトに本研究科の学生が採用され、徳島大学大学院生受給者全体に占める割合は、それぞれ約4割を超える実績となっている。さらに、学位審査基準の見直しを行い、教育、研究双方のより一層の充実を図る。	

医科栄養学研究科	最終評点：18点
《特記事項》	
○ 「宇宙専門管理栄養士（仮称）/理学療法士」の育成を目指した新たなコースの開講準備	

文部科学省の宇宙航空科学技術推進委託費（宇宙航空人材育成プログラム）に採択されたことを契機に、博士前期課程において、長期宇宙滞在者を食と運動で支える“宇宙専門管理栄養士（仮称）/理学療法士”の育成を目的として、宇宙栄養学コースを新たに令和5年度から開講する。開講に向けて、本学と京都府立医科大学、国立医薬基盤・健康・栄養研究所とで包括連携契約を締結し、宇宙栄養学や機能性食品学、宇宙医学等、本コースに関連する講座を協力して実施する予定である。

保健科学研究科	最終評点：17点
<p>《特記事項》</p> <p>○ 「がんゲノム医療で活躍できる臨床検査技師の育成」プログラムの強化 令和3年度に設置した「がんゲノム医療で活躍できる臨床検査技師の育成」プログラムにおいて、県内3カ所の基幹病院との連携により細胞診に関する実習体制を構築しており、令和4年度は徳島大学病院がんゲノム医療部門及び同遺伝カウンセリング外来の協力により、がんゲノム医療の実際の現場見学を実施することができた。</p> <p>また、本プログラムの大学院生1名が研究成果を発表した地方学会にて、優秀賞を受賞し、がん拠点病院の病理部門に就職するなど、本プログラムにおける教育研究活動が成果に繋がっている。</p> <p>○ 学際的教育の推進による博士前期課程からの英文学術雑誌掲載者数の向上 他研究科との連携による学際的教育の推進や、計画的な留学生の受入、及び協定校との定期的な交流などにより、博士前期課程学生の約3割が国際学会での発表や、英語論文の執筆を行うなど、国際学会発表数や国際学術論文数の着実な増加に繋がっている。</p>	

#### ■ 研究(研究部、研究所)

社会産業理工学研究部	最終評点：15点
<p>《特記事項》</p> <p>○ 研究プロジェクト支援の強化 研究部長裁量経費による、教育・研究プロジェクトの支援は、教育力、研究力、地域貢献力等の向上、機能強化、外部資金獲得等に資する事業を対象とし、大学として達成を目指すKPIとの関連を踏まえ、中期計画及び組織別評価における研究部関連のKPI向上の期待効果について、新たに申請時に明記させることとした。審査の結果、総合科学域2件、理工学域9件、生物資源産業学域3件、計14件の支援を実施した。また、同経費で、教職員のコミュニケーション促進を図るとともに、教育研究活動の活力養成を目的として、共通講義棟6階にイノベーション・コモンスペースの整備を行った。</p>	

医歯薬学研究部	最終評点：19点
<p>《特記事項》</p> <p>○ 医療系4学域の特色を活かした共同研究推進に係る多様な支援 今後発展が期待される遺伝子治療や再生医療において不可欠な技術であるDDS（薬物送達システム）研究に関して、我が国初の革新的DDS製剤の開発とDDS研究者の育成を図るため、「DDS研究センター」を令和5年度より新たに設置する。</p> <p>また、既存の総合研究支援センターでは、オミックスデータ解析の強力なツールであるソフト</p>	

ウェア IPA と新たに契約するとともに、酸化エチレンガス滅菌器等、各種研究に使用する機器の新規導入、更新を行うなど、共同研究推進に向けた多様な支援を実施した。

- 高度な専門技能を有する医療人育成のための実践的リカレント教育プログラムの研究開発  
看護リカレント教育センターで開講している全国初となる特定行為研修を組み込んだ在宅ケア分野の認定看護師教育課程と看護師特定行為研修について、第1期生の21名全員が認定看護師認定審査に合格した。さらに、令和5年度からは感染管理分野を新たに開講することが決定するなど、高度な専門技能を有する医療人育成のための実践的リカレント教育プログラムの開発に取り組んでいる。

先端酵素学研究所

最終評点：19点

《特記事項》

- 若手人材育成に向けた女性研究者の登用  
研究分野の拡充及び若手人材育成のために、クロスアポイントメント制度を活用して、基幹研究部門にバイオインフォマティクス研究分野の新設、研究者の採用を行ったほか、AWAサポート事業により、重点研究部門における若手女性研究者の昇進を行った。なお、昇進を行った教授は、令和4年度のJST「戦略的創造研究推進事業（さきがけ）」に採択され大型外部資金を獲得する等の研究成果を上げている。
- 地域連携による研究活動及び次世代研究者の育成  
徳島県が保管する健診データ解析やコホート研究を行い、地域健康課題を可視化する研究を推進しているほか、徳島県地域医療連携基盤「阿波あいネット」を活用した研究の推進、県の補助金による糖尿病関連創薬研究の推進等、地域連携による研究活動を積極的に実施している。さらに、本研究所の設備や施設を活用し、最先端の研究に実際に触れることができる高校生向けDNA講習会を実施し、次世代の研究者育成を目指した活動を行っている。

ポストLEDフォトンクス研究所

最終評点：21点

《特記事項》

- 支援体制の強化による研究資金、研究活動状況における優れた実績  
研究所としての重点テーマの模索や研究資金獲得、研究連携の推進を図るため、部門長以上で構成する「研究戦略会議」を新たに設け、外部評価者も含んだ研究評価を定期的に行う体制を導入した。  
研究支援体制の強化により、令和4年度の研究資金獲得総額は約2.9億円となっており、特に、総務省「電波資源拡大のための研究開発」（36,000千円）、「Beyond 5G 研究開発促進事業」（40,000千円）等、大型外部資金獲得に繋がっているほか、本研究所における共同研究・受託研究数は計23件と優れた実績を上げている。  
また、年間発表論文28報のうち、約4割の論文がTop10%論文となっており、学術レベルの高い研究を推進している。
- 光関連応用研究の推進  
内閣府による地方大学・地域産業創生交付金事業の採択事業、徳島県「次世代”光”創出・応用による産業振興・若者雇用創出計画」によって支援され、地域の産学官金の連携により推進している次世代光研究について、内閣府により新設された、事業の着実な進捗と、既存の計画以上の加速・強化・拡大が見込まれる取組に限り最長4年間の追加支援を行う「展開枠」に認定

された。

また、次世代移動通信に資する「オール光型テラヘルツ通信」に関する研究開発の実施等、研究所において光関連の応用研究を積極的に推進しており、次世代通信に関する研究連携体制強化のため、オールジャパン体制で標準化技術への採択を目指す国内トップレベルの研究者による研究会「集積コムによる通信コンソーシアム」を企画し、設立に向けた準備を行っている。  
(SDG9、11)

## ■ 共同教育研究施設等

教養教育院	最終評点：17点
《特記事項》	
○ 語学教育センターが実施するプログラムの参加者数増加 語学教育センターが実施するプログラムでは、参加学生からのフィードバックを踏まえ、内容の改善を図るなど、より学生のニーズに応じた学習機会の提供を行っている。令和4年度は、週1回のコースとともに、さらに1日コースを充実させた結果、プログラムの参加者数は、前年度571人を上回る652人となった。	
○ TOEIC-IPの平均点上昇 語学教育センターにおいて、学生のレベルに応じた様々な英語プログラムを実施したほか、希望者の要望に応じ、TOEIC及びTOEFL対策を目的とした夏季集中コースを新たに2コース追加講ずるなど、柔軟に対応した結果、TOEIC-IP全体の平均点が422.6点となり、前年度と比較し4.7点上昇した。併せて、評価指標の基準となる第3期実績年平均を1、2年生平均点、3年生以上平均点ともに上回る実績となっている。	

高等教育研究センター	最終評点：20点
《特記事項》	
○ イノベーション人材の育成 イノベーション人材の育成を推進するため、創新教育推進班に新たに教員を配置するなど組織的な実施体制を構築している。また、イノベーション創出プロセスを設計、実施できる人材を育成する「徳島大学i.school」を令和4年度から新たに開始し、12名が修了した。 さらに、国内外のデザイン思考を用いたアイデアコンペやビジネスプランコンテスト等の入賞数が第4期中期計画における達成目標の50件に対し令和4年度単年で18件と、既に約4割を達成している。	
○ 就職マッチング支援事業における内定獲得率の向上 学生が企業からオファーを受ける未内定者向け支援「就職マッチング支援事業」では、学生説明会の複数回開催や参加する県内企業の大幅な増加等に取り組んだところ、本事業参加者における内定獲得率が前年度の28.6%を大きく上回る48.4%となった。	
○ 追跡調査システムの整備による入学者選抜の改善 入学者選抜の改善に活用できるよう、新たに一般選抜（前期・後期）と特別選抜（推薦Ⅱ）を対象に入試教科・科目間の相関係数、教科・科目の全体における合否への影響度を示す「共分散比」などを全学部・学科等单位で分析した他、「追跡調査システム」を整備し、個別学力検査等の検証が可能となった。これら調査・分析の内容は、毎年度発行している「徳島大学高等教育研究センターアドミッション部門報告書」にて取りまとめている。	



デザイン型 AI センター	最終評点：16点
<p>《特記事項》</p> <p>○ 文部科学省「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度」 令和3年度に開始した「データサイエンス学修プログラム」が、令和4年度に文部科学省「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」に認定された。これと並行し、令和6年度の応用基礎レベル認定を目指し、要件を満たす中級レベルの教育プログラムの検討・準備を進めた。</p>	

キャンパスライフ健康支援センター	最終評点：16点
<p>《特記事項》</p> <p>○ 学生定期健康診断の受診率向上 学生の定期健康診断の受診率向上を目指し、常三島・蔵本両キャンパス内での案内看板の設置や、ホームページやSNSを活用した周知等を実施した結果、受診率は学部生、大学院生ともに昨年度より増加した。また、健康診断結果を踏まえた事後指導について対面及び文書において100%フォローすることで、学生の心身両面に対するケアを適切に実施した。</p> <p>○ ピアサポーターの育成 アクセスビリティ・オンライン講座の受講を促すなど、対面での勉強会や実習が困難となったコロナ禍でも積極的に障がい者支援を行うピアサポーターの育成に取り組んだ結果、令和4年度のアクセシビリティリーダー認定試験では、第3期実績年平均の約2倍となる18名が合格した。</p>	

放射線総合センター	最終評点：15点
<p>《特記事項》</p> <p>○ センター利用者へのサポートの充実 利用者の研究ニーズに応えた技術相談・支援のため、新規利用者からの要望に応じた実験室の整備や、センター利用者からの問い合わせへの対応、積極的な声かけ等を行った結果、研究技術相談や支援業務回数の増加に繋がり、第3期実績年平均を上回る69件の支援業務回数となった。</p>	

環境防災研究センター	最終評点：20点
<p>《特記事項》</p> <p>○ 防災士養成講座による防災人材の養成推進 防災士養成講座を学生、県民、小松島市と神山町職員向けに行ったほか、徳島県と協力して企業版ふるさと納税制度を新たに設置し、社会人の受講料支援を実施するなど、防災人材の養成に係るリカレント教育の推進を行った結果、国立大学主催による講座では全国1位（全大学では2位）となる防災士養成講座修了者数（計506名）となった。</p> <p>○ 大学BCPの立案に向けた取組 災害時の大学BCP立案に向け、学内の全事務組織を対象とした組織横断的な調査を行い、巨大災害に被災した場合の課題のとりまとめや、被災経験を持つ大学へのヒアリングを実施するなど取組を進めている。また、取組の状況は、全役員に向けたワークショップを開催することで、役員との災害リスクの共有を行った。</p>	

- 研究成果の積極的な情報発信と多様なニーズに応えた社会貢献活動  
四国放送TV「フォーカス徳島」やエフエム徳島「防災cafe」など、テレビ、ラジオ、YouTubeといった情報メディアに約60名のスタッフが出演しており、広く研究成果を発信している。  
また、環境保全や防災といった本研究所の研究成果について、多様な社会ニーズに対応し、セミナー等への積極的な講師派遣を行っており、令和4年度のセミナー等における講師等派遣者数は391名と第3期実績年平均の230名を大幅に上回る実績となっている。

研究支援・産官学連携センター	最終評点：20点
<p>《特記事項》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 外部資金獲得に向けた支援体制の強化 企業出身の産学連携コーディネーター（5名）や客員教授（2名）を新たに雇用し、組織的な支援体制を強化するとともに、研究成果の知財化、事業化に向けて大学全体の有望技術シーズを抽出するため、外部資金（公的競争的資金、企業との共同研究費）獲得状況の解析を実施、研究クラスター制度の刷新、前年度科研費不採択者に対する助成事業の実施等、産官学連携の推進や公的競争的資金の確保に伴う支援を実施した結果、文部科学省「国立大学経営改革促進事業」（4年間：990,146千円）など大型外部資金獲得に繋がった。</li> <li>○ 地域創生による研究成果の社会実装 大学発ベンチャー企業の設立が期待できる研究者の育成・支援等を目的として産学連携研究者育成支援事業を実施した結果、今年度は4件の大学発ベンチャー企業創出に寄与するとともに、第3期実績累計を上回る129名のベンチャー雇用創出数となった。</li> <li>○ SDGsに関連する研究への支援 SDGsに関連する研究の社会実装化、SDGs達成の貢献等を目的とした「SDGs推進研究支援事業」では、SDGs達成への展開が期待できる研究課題としてSDGs推進委員会の委員から推薦のあった8課題について研究活動費の助成を行った。（SDG9、SDG17）</li> </ul>	

先端研究推進センター	最終評点：18点
<p>《特記事項》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ バイオイメージング機器群の稼働実績の向上 イメージング機器の運用に必要な研究支援活動としてオンデマンド講習など小規模の講習会を複数回実施する等の工夫を行った結果、コロナ禍の影響で全学的に実験規模が縮小傾向であったにもかかわらず、全イメージング機器の稼働件数は令和元年度以降4年連続増加し、令和4年度は前年度比110%増加を達成した。</li> <li>○ 動物実験施設の換気風量削減による省エネルギー化施策 動物実験施設において最も効果的節電施策となる換気風量の削減は、施設内のSPF環境に大きな影響を及ぼすリスクがあり全国の大学で実施できていない状況にあるが、当センターでは積極的に取り組み、新たにSPF環境モニタリング体制を構築した結果、第3期実績年平均（3,795,450MJ）を大きく上回る、約4,294,964MJの一次エネルギー量の削減を達成することができた。（SDG7）</li> </ul>	

人と地域共創センター	最終評点：19点
<p>《特記事項》</p> <p>○ 「とくしま創生人材・企業共創プログラム」COC+R 事業における優れた実績            大学による地方創生人材教育プログラム構築事業（COC+R）として、「とくしま創生人材・企業共創プログラム」を推進しており、共同授業やエクスターンシップの実施、実践型インターンシップの拡充などを行った結果、令和4年度は目標を上回る参加実績となっている。特に、教育プログラム修了者数及び地元就職者数は目標数15名に対し、それぞれ32名、29名と計画を大幅に上回る成果を上げている。</p> <p>○ アントレプレナー教育の実施及び受講生の活躍            地域の中でしごとを創りだし、地域の新しい担い手を創りだすことを目的とする「まちしごとファクトリー」を実施した結果、受講生による4件の起業実績があったほか、アントレプレナー教育を受講した学生のビジネスプランに関するコンテスト等受賞件数は18件となるなど着実な成果に繋がっている。(SDG8)</p> <p>○ 地域産業人材育成講座の実施及び再編            次世代リーダーのさらなるステップアップのために開講している社会人対象の「地域産業人材育成講座」において、令和4年度は8講座を開講し46名が修了した。また、従業員のエンゲージメント向上に資するビジネス・リスクリング講座を加えた「とくしまリスクリング講座」を新たに開講できるよう、講座の開発及び体制整備を行う等、学外の社会人等を対象としたリカレント教育の推進に取り組んでいる。(SDG4、8)</p>	

大学産業院	最終評点：18点
<p>《特記事項》</p> <p>○ アントレプレナー教育を受講した学生の活躍            起業家教員等による次世代産業人材創出プログラムの実施や、TIB（徳島イノベーションベース）との連携、セミナー開催などアントレプレナー教育を推進した結果、産業院のプログラムに参加した学生による13件のビジネスプランコンテストの受賞に繋がっている。中でも、次世代産業人材創出プログラムを受講し、起業した学生が、朝日新聞社主催「大学SDGs ACTION! AWARDS 2023」ジェンダー平等推進賞を受賞する等、SDGsの目標達成にも寄与している。(SDG4、5)</p> <p>○ 産学連携コーディネータによる伴走支援            産業院教員に対し、専任の産学連携コーディネータが商品化や起業に向けたPOC（Proof of concept）経費支援、特許化支援等を実施した結果、産業院教員により、徳島大学発ベンチャー企業（株式会社 Egret・Lab）が設立されたほか、5件の特許出願が実施された。(SDG8、9、17)</p>	

バイオイノベーション研究所	最終評点：17点
<p>《特記事項》</p> <p>○ 新規研究施設を拠点とした共同研究等の促進            令和5年8月から稼働予定の「ヴォルテックス棟」について、既に4企業（ミヤリサン製薬株式会社、株式会社ジェイテクト、株式会社グリラス、全国農業協同組合連合会徳島県本部）の入居が内定しているほか、本棟で開始予定の共同研究に関し三者協定を締結する等、新規研究</p>	

施設を拠点とした共同研究について積極的な研究支援を行った。

○ マリンサイエンスゾーンの研究成果を活かした商品開発

マリンサイエンスゾーン協定に基づき、本研究所教員の特許を基にしたベンチャー企業「海藻ラボ」、本学、徳島県、徳島文理大学が連携して共同研究を進め、「陸上養殖技術」による海藻の二毛作に成功し、収穫された海藻を、乾燥製品として商品化した。

情報センター

最終評点：18点

《特記事項》

○ 電子申請化及びRPA等による業務の最適化および効率化

RPAツールの包括契約を行っているMicrosoft365のアプリケーションPowerAutomateを活用することで、第3期実績年平均の4件を大きく上回る16件の業務について電子申請・RPA化を実施した。また、これらのデジタル技術の活用による業務の最適化及び効率化により、想定された業務時間の年間1,014時間の削減が見込まれた。

○ 情報セキュリティ教育における受講率100%達成

情報セキュリティ関連知識の理解・浸透とともに、全学的なセキュリティ意識向上のために実施している情報セキュリティ教育では、教職員に対し研修受講の啓発活動を積極的に行った結果、「情報倫理学習」及び「情報セキュリティ・個人情報保護に係る自己点検」e-learningコンテンツにおいて、統計開始以降初の受講率100%を達成した。

AWA サポートセンター

最終評点：15点

《特記事項》

○ ダイバーシティ推進に向けた支援活動による各種アンケートでの高評価

日頃から実施している男女共同参画にかかる啓発・広報活動及び女子学生・女性研究者のキャリア支援活動や、研究力向上のためのセミナー、ワークライフバランス支援に係る施策を実施し、これらの利用者に対する各種アンケートにおいて80%以上の高評価を獲得することができた。(SDG5)

埋蔵文化財調査室

最終評点：14点

《特記事項》

○ 調査・研究成果の積極的な学外発信

発掘調査の情報発信のため、クラウドファンディングで資金獲得を行い、令和4年度に発掘調査報告書を刊行した。また、市民講座や展示会、中学校職場体験授業等を積極的に実施することで、最新の研究成果について学外及び市民へ普及を行った。

附属図書館

最終評点：16点

《特記事項》

○ 電子書籍の整備・充実

社会的なニーズが高まっている電子書籍について、新規購入や医学系電子書籍メディカルオンラインの年間購読を新たに開始する等積極的に導入を促進した結果、電子書籍の利用可能タイトル数は前年度の2倍以上となる、13,051冊となった。併せて、電子書籍の試読サービストライアルの実施や、利用周知の広報活動の実施により、構成員1人あたりの電子書籍年間アクセ

ス数も前年度1.67から1.83に上昇した。

○ 図書館利用環境向上の取組

本館における早朝の時間外特別利用の対象を学部生に広げて試行するなど、利便性の向上に取り組んでいる。また、本館内の防犯カメラを増設することで、図書館利用時の安全性の向上を図った。

■ 病院

病院	最終評点：20点
<p>《特記事項》</p> <p>○ 質の高い高度な低侵襲医療の提供</p> <p>従来のロボット支援手術及び低侵襲手技に加え、新たに、脳梗塞と出血合併症のリスク、手術時間や退院までの日数について軽減ができる完全内視鏡下心房細動手術（ウルフ-オオツカ手術）を四国で初めて導入する等、高度な低侵襲医療を積極的に実施した結果、低侵襲医療の実施症例数は第4期中期目標期間の目標値470件を大きく上回る708件となった。</p> <p>○ 高度医療人の育成</p> <p>高度先端医療を支える専門知識・技能を持つ資格等を有する人材育成を各診療科・診療部等で積極的に進めており、十分な症例経験の機会を提供した結果、令和4年度新規専門医・指導医の取得者数は第3期実績年平均（57名）を大きく上回る108名の新規取得があった。</p> <p>また、先進的な手技の開発・習得を目的に実施している低侵襲トレーニングプログラムでは、診療科等から多数のプログラム開催希望があったことに伴い、通常開催数を増やしたところ、プログラム修了者数は261名と第3期実績年平均を大幅に上回る実績となった。</p>	